

## 展 示 会

翻訳日本昔噺のこゝろ—“江戸・明治期の翻訳された子供の本” 1979. 6. 1~7

開催決定から展示まで、与えられた日数は僅か3週間弱であった。当館では、所謂“ちりめん本”を含む各国語訳“日本昔噺”シリーズを相当数所蔵している。展示会が“観せる場”である以上、美しい彩色版面を持つこれらのシリーズを柱としたのも、事の経緯からの必然であった。私たちは“めくる”作業に忙殺された。これらの大方は長谷川武次郎（弘文社）の手になるが、関西で刊行されたものもある。『昔噺善悪桃太郎』（明20）がその一つである。表紙絵は人口に膾炙した桃太郎だが、主人公は双頭の人物で、内容も全く異り、グロテスクな雰囲気を持つ。異版として出品を決めたものの“めくる”形で展示するからには、表

紙で逃げるわけにはゆかなかった。私たちがこの話の典拠を確認し得ず焦燥を深めている時、鈴木重三主任司書から教示があり、本書が山東京傳の黄表紙『両頭筆善悪日記』（寛政11）に拠ることが判明した。展示にかかる前日夕刻であった。これは“黄表紙四十種”にも入っており、明治に下って大阪で刷られたものもあるという。お伽噺の内容をすりかえたのは、長谷川本の名声に対する遠慮でもあったのか。展示しなかったものにも同様の異本をみた。私たちはこの黄表紙を書庫に戻さず、英訳本と同じ挿絵をめくり、注も付さずに展示ケースに入れた。如何なる反響が戻ってくるかという期待があったが、それは予期した以上のものであった。

\*長谷川本の史的位置づけについては、森林太郎（等）撰『日本お伽集1』平凡社 昭47（東洋文庫）の瀬田貞二氏による〈解説〉に委しい。

（伊藤 尚武）

Good and Evil Momotaro

「昔噺善悪桃太郎」



「両頭筆善悪日記」

